

# 教 仁 名 聞

第 176 号 毎月発行  
(発行日) 2025 年 5 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutsuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8 月は休み  
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

## 恩の字義

佐々木蓮磨

恩という考えは、古来西

した。

洋にはなかったようです。これは東洋でも、とくに仏教でやかましく言われてきた道徳でありまして、日本人の心の中には深くしみついている思想であり、また感情であります。ところが、戦後は人権尊重ということが、やかましく叫ばれるようになり、その結果、恩という考えは全く忘れられたように感じがいたします。終戦直後のことでありましたが、私の地方で物故された先生の慰霊祭が行われました。その時、主催者である村長の挨拶に「今日の行事も戦前であれば、亡くなった先生方の御恩を謝する意味でとり行なうものであるが、現代は恩ということを言わぬようになったので、今日は亡くなった先生方に対する愛情の気持ちからこの慰霊祭を営むのである」ということばがありま

した。その挨拶の後で、私に法話を求められたので、私は演壇に立つや否や、村長の挨拶に対して次の如く反論しました。「ただ今、村長さんのお話を聞くと、恩ということを言わぬ時代になったというお言葉でありましたが、私の考えでは恩というのは、時代の如何を問わず、人間として当然感ずるものであって、決して義理や体裁(ていさい)でいうものではないと思います。したがって恩ということと言わないのは、却(かえ)って人間性を抑えるものであって人間尊重の精神に反するものではないかと思

います云々」と。これは私の勝手な解釈ではありますが、「恩」という字は心の上に因(よ)という字を書きます。因はタネであって物の生ずる原因であります。その因を心の上に置くということばは、物の生ずる原因を心に思うことであるでしょう。すべての出来事を追求して行きますと、自分の力でできるものは一つとしてありません。すべては他力の為さしめであります。食べる食物も、被(き)る着物も、また働く力も、心の作用も、厳密に吟味(ぎんみ)して行きますと、他力の為さしめでないものはありません。清沢満之師は「現前一念の心の起滅も自在なるものにあらず、我等は絶対的に他力の掌中にあり」と言われましたが、まことに真(まこと)を穿(うが)ったことばであると思います。人間は、いつが始めともなく「我」という迷いにダマされてウヌボレ、わが力で考え、わが力で働き、わが力で生活しているように思い込んでいるのですが、それは恐るべき錯覚であります。親鸞聖人の他力の教は、ここの錯覚を払い除(の)けて下さるいわれです。

すべてが他力の為さしめと知らされてくると、ここに「ありがたい」という気持ち、「御恩」という気持ちがあります。「ありがたい」というのは「有ることが難しい」ということで、すべてのものの生起する原因を追及すると、自力ではなく、全く他力の為さしめであるから感謝するほかはない、ということばが御恩ということばとなり「ありがたい」ということばとなって現われてきたのでありましょう。蓮如上人は「冥加(みょうか)」ということばをお使いになりましたが、冥加とは、冥は暗(くら)いということばで、目に見えない意味です。すなわち人間の目には見えないところに仏の力(他力)が加わって下さるということばです。こういう真実の姿は、人間の知恵でわかるものではありません。他力の教によって与えられる仏智で知れるのであります。そこで親鸞聖人は「信心の智慧に依りてこそ、仏恩報ずる身とはなれ」と教えられました。

# 清沢満之先生に学ぶ ③

以下は『清沢満之の言葉』

(永田文昌堂、二〇二三年) の中の「宗教的信念の必須条件」という文章の言葉を引用し、感じているところを述べたものです。清沢満之先生はこの中で次のようにいっています。

世の人の多くが宗教的信念を求めつつも、容易に安住の地に達し得ないのは、明らかに此の必須条件が判っていないからであると。されば、その宗教的信念の必須条件とは何であるか。

まず「世の中の多くの人が宗教的信念を求めている」といわれています。「宗教的信念」とは信心とかさとりとか真実の自覚とかいうことです。ただ、清沢先生のおられた明治時代と違って現代は、自らの課題として宗教的信念を求めている人

は少ないのが現状です。

ではそうした信念(信心)のない人生が、安定し充実して、生きている新鮮な感覚があるかというところ、そうは思えません。人生全体が不安であり、どこかいのちの芯がからつぽになつていて、その空虚感を日常のあれこれの忙しさにまぎらかし、その虚しさを娯楽や趣味や道楽の刺激で慰めているのだといえないでしょうか。

そのような状況の中から、「これではいかん、なんとかして本当の安らぎ、生きている喜び、充実がほしい」と自覚的になつて、心の底からの願ひに従つて生きようと思ひ立つ、それが求道心とか宗教心とかいうもので、これは人間の根源的な要求だといえます。

ちなみに私の場合、若い頃、宗教心が起こる縁にな

つたのは、當時やりきれない心の状態になつていたからです。それ

はどうであつたかというところ、  
「自己と他者・世界の間の具体的な存在感、生命感が失われ、それらと自己の一体的なつながりを実感しない精神状態」「透明なガラスで覆われて外部世界と自己とが切り離されたような状態」になり、生きた心地がしなくなつて、大変やりきれない状態になつたのです。それが縁で宗教ことに浄土真宗を求めたのでした。このような心の状態になつたという経験は、長い間自分だけのようになつてしまつたが、だいたい後になつて、哲学者の滝沢克己先生や西谷啓治先生も若い頃似たような経験をされたことを知りました。滝沢先生は、十二才頃から、

分が話しているつていう気がしなくなつてくるようで、何か透明なこう厚いガラスで隔てて物を見たり、人と話しをしているようなふうになつて」「(滝沢克己最晩年に語つたこと)、中川書店、二〇一七年、一三頁)、あるいは西谷先生は二十才の頃の経験で、「僕の場合は、哲学しながら足が地につかないという感じで、まあ一種の悩みがあつたわけです。でもそういうことは哲学を一応やつてゆく上には問題にならない。でもやつぱり自分としては、しょっちゅうそれが問題になる。ハエがね、ガラスにぶつかつて、出られない。あれにちよつと似ているような感じで、ガラスが一枚、間にあるというところ」「(「直接経験」、春秋社、一九八九年、五七頁)

つて、私は全くの愚鈍の者ですが、精神状態としてはほぼ同じような状況だったと思います。ですので、これは私一人の特別な経験ではなく、だれにでも起こり得るのだと、後年になつて知りました。

そういう事で、この問題が解決した瞬間の経験は、目の前の柳の緑の枝葉を見て「ああ、きれい！」でした。それまでは何を見ても、ナマの実感が乏しかったのです。そして不思議にもそれまで長年頭にお椀をかぶうつとうしかつたのが同時に取れてなくなりました。

私の場合はこういう縁で宗教的信念を求めるようになりましたが、宗教に救いを求める縁はいろいろあるだろうと思います。人によつて、「死がこわいという死への恐怖」とか「死後、どこへいくのか、地獄へ落ちるのではないかという不安」とか「人生がむなしくてしかたがない、何とかしたい」などいろいろあると

思います。

しかしながらこういう問題がすぐに解決されるのかというと、すぐに解決される場合もありますが、多くの場合なかなかそうはいかないのが現実です。いつまでたっても「容易に安住の地に達しない」のです。どうしたらこの安住が見いだされるのか。求めているにもかかわらず問題が解決されないのはなぜなのか。解決に向けての条件があるとすれば、その条件は何なのかという問いを清沢先生は立てられました。それにについて先生は次のようにいっています。

にはなれまいと思う。かく言えば、或いは問う者があるう。それでは宗教を信ずるには、家を出て山林にでも隠遁しなくてはならぬかと。

私は思う。誰でも釈尊と同様に必ず一度は山林に隠れねばならぬという訳はない。山林に隠れてもよい。身体が家にあるうと山林にあるうと、商売して居ろうと軍隊にあるうと、それはどうでもよいが、ただ一つ肝要なことは、心にこの世の一切の事物を頼みにせず、一心専念に絶対の如来に帰命することにある。

先ず始めに宗教以外の総ての事々物々を頼みにする心を離れねばならぬ。自分の財産を頼みにし、自分の妻子朋友を頼みにし、自分の親兄弟を頼みにし、自分の地位を頼みにし、自分の才能を頼みにし、自分の学問知識を頼みにするようではならぬ。如何なる事物をも頼みにしないというようにならねば、なかなか宗教的信念を得るよう

ども博士号もほしいとか、阿弥陀仏にも会いたいが高い地位もほしい、というように、宗教的な救いを求めるにしても、それが「ただ一つの大事」にならなくて、

たしかに救いも大事だが安定した収入の確保も大事であるという具合に、精神的に二股をかけていては「なかなか宗教的信念を得るようにはなれない」といわれるのです。

この人生の根本問題を解決するために、貧乏してもよい、社会的地位は低くてもいい、学歴はなくてもいい、家族や友人から相手にされなくてもいい、この世の価値あるものは何一つ得られなくてもいい、阿弥陀仏だけには会いたい、真実がわかりたい、信心を得たいという態度でなくては「宗教的信念を得ることは難しい」といわれるのです。なかなか厳しいことですが、実際そうであろうと思います。

以前、念佛寺に初めて来られた方で、少し法話をし

た後の座談の時、発言があり「私は真宗の救いは易しく楽にいただけだと思うっていましたが、難しいのですね」と言つて、その後は寺に來られなくなりました。

「すぐ救われる、楽になれる」と期待したが、そうではないと知つて、その後どうされたのかわかりません。インスタントに楽になれる宗教のように考えていると期待外れに終わります。

真宗はお念仏一つを称え、お念仏を聞くだけでよいので、行は極めて易しいのですが、そのお念仏を信じる信心は「難信」なのです。仏説無量寿經に「往き易くして人なし」という仏語の通りです。なぜ信じることが難しいかというと、自分の自我で、無限者である阿弥陀仏なり本願のはたらきなりを「つかもうとする」のは、自我の能力（知性）を頼みにしているからです。

一般に私たちの自我の心には「我賢し」という高ぶりがあり、それゆえ仏法を聞いても素直に受け入れられないのです。正信偈には「邪見

・きょうまん 憍慢の悪衆生、信樂受持すること甚だもって難し」と説かれています。その邪見・憍慢がすた廃るのは、念仏聞法に於いて自力のありだ

けを尽くして「我が力及ばす」と我が身の無力無能を知る。我が身の無知無力を知るには自分の力を出し切らねば、それを実感して知れないのです。自分の力を尽くして念仏聞法する、それが大事なのです。

なぜ信心がただけなのか。それはやはり清沢先生がおっしゃるように「心にこの世の一切の事物を頼みにせず、一心専念に求める」、この姿勢が足りないからだと思います。名師の香樹院徳龍師も、

これ一つ聞きつけずば置くまい置くまいの心がゆるんだら、仏になる種を失うたと思え。

といわれています。これは真宗だけではなく、禅宗でもキリスト教でも同じでしょう。真宗以外の仏教で、家を捨て独身生活をし、戒

律を保ち様々な享樂を離れて、厳しい修行をして仏道を歩む道が説かれているのはそのためです。真宗は在家のままで救いをいただくける宗教ですが、仏法を求める態度そのものは出家の修道者と変わらぬ熱意があるのでしよう。真宗は普通の生活をしながら助かる宗教だからといって、あれもこれもと心を散らせ、世間の宝を求めつつ、その一つとして真宗の教えを聞くということではなかなか真実にはあえないのではないでしょう。

しかしながら、ただこのこと一つを専心に求める力は自我（自分）から出るのではないと思います。真実そのものの動力がその人に促し、進め、向かわせるという、いわばいのちの底から起こる根源的なはたらきに由るのでしよう。清沢先生は宗教心を「人心の至奥より出ずる至盛の要求」といいました、人心の至奥とはいのちの底、いのちの底とは量りないアミダのいのち、そこから起こるといえ

まし。人間的なガンバリとか自らの決意というような自分の願いの力ではなく、自我を超えたアミダ仏の動力にもよおされて起こるのが宗教心でしよう。この宗教心はだれでもがいつせいに起こることはありませんが、縁がくればいつでも誰にでも起こり得るのです。誰でもいのちの底には、「我に帰れ」「我がいのちに帰らしめずにはおかない」という阿弥陀仏の大悲の願力がはたらいていて、それが縁によって人の心に吹き出してくるのでしよう。そういう意味でだれでもがその可能性の中に生きているのです。宗教心はその個人の願望とか性格によるのではなく、人のいのちの底からの喚びかけのはたらきに揺り動かされて起こるのでしよう。

どういう縁によって宗教心が起こるのかは、先ほど申しましたように人それぞれです。釈尊は、外出して道で老人や死人を見て、そ

れが我が身のこととして問題（憂苦）になったという縁で道を求めました。盤珪禪師は子供の頃から「おまえも死ぬ」と聞くだけで身が震え、それが問題で道を求めました。木村無相さんは二十才の頃「親が憎い、親を殺して自分も死にたい」という自分のヒドイ心に驚いて、「この心をなんとかしたい」という課題から仏教の教えを求めました。滝沢先生は中学校からの帰り道、お百姓さんが水車を足で踏んで回しているのを見て、「自分はどこからきてどこへいくのだろう」ということが問題になり、それが離れなくなったのが最初の縁になりました。人によって

自分を尽くすというの自分のガンバリや決意によって尽くせるものではありません。どうしても求めざるをえないという、いのちの底からの強い願いの促しに押されて求めていくのだと思います。凡夫は「苦しいの嫌いで楽がほしい」という、そういう凡夫の心しかない私たちに対して阿弥陀仏の願いの力が引つ張ってくれて、どうしてもトコトン求めざるをえなくなるのです。決してその人の性格がまじめだからとか凝り性だからというのではなく、阿弥陀仏からのものよおしによって、仏法を求めるというのが真相です。だから真実にであつても自分がガンバッタから真実にあえたのだとはとても思えないのです。親鸞聖人の和讃に「智慧の念仏うることは法蔵願力のなせるなり」とか「釈迦・弥陀の慈悲よりぞ願作仏心（信心）はえしめたる」と仰せられています。その通りだと思

【住職雑感】  
四月五日。親族の永代経法要を釈尊降誕会と一緒に行う。二名ほどの参加。パーリ語の三帰依文を唱和し、偈文をあげている間に、誕生仏に甘茶をそそぐ。その後少し法話をして釈尊の教えに触れてもらう。続いて永代経の勤行に移り、全員で阿弥陀経を読誦、その間焼香をする。亡くなられた親族の多くの写真を法名軸の前に並べて故人を偲ぶ。全員の写真撮影をして、会食となる。この法要の会費は一人三千円なのでたいしたごちそうはないが、一緒に談笑しながらの食事は楽しい。一人一人近況を報告する。若い人の成長は著しい。大阪、奈良、そして東京からも参加があつた。一年に一回の会合であるが、目には見えない意義を感じる。現在、法事をする人が少なくなっているが、法要という縁によって、親族が心を通わせ、つながりを深めて、できうれば仏教に親しんでもらいたいのである。今日、人縁が乏しくなり孤独になりがちなか中、法要の縁が人と人の出会いの場となるなら、その意味は小さくないと感じる。